

## 第1回「国際交流基金の運営に関する諮問委員会」

### 議事概要

1. 日 時：2014年1月27日(月) 15時～16時半 (17時まで延長)

2. 場 所：国際交流基金 JFIC ホール「さくら」

3. 出席者：

〔委員〕 ※五十音順

五百旗頭真座長(熊本県立大学理事長、ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長)

池内恵委員(東京大学先端科学技術研究センター准教授)、川島真委員(東京大学大学院准教授)、久保文明委員(東京大学大学院教授)、千野境子委員(産経新聞社客員論説委員)、永井多恵子委員(せたがや文化財団理事長、国際演劇協会会長)、水沢勉委員(神奈川県立近代美術館館長)、宮本亜門委員(神奈川県芸術劇場芸術監督)、渡辺靖委員(慶應義塾大学教授)

〔国際交流基金〕

安藤理事長、櫻井理事、川村統括役、柄総務部長、下山アジア交流特別事業準備ユニット部長

4. 議事：

- (1) 委員会運営案について
- (2) 国際交流基金の現況説明
- (3) 国際文化交流活動を担う他機関の動向について

5. 議事概要：

国際交流基金(以下、「基金」)側から各議題について説明を行った後、委員が各議題に即して意見を述べた。委員の主な発言は以下のとおり。

- ・ 基金は、きめ細かく丁寧に事業を行っており、積み上げてきた交流事業に自信をもってよいと思うが、他国も文化外交に力を入れている状況や日本という国の大きさに比べると、まだ規模が小さい。「文化には政治性がある」という側面を認識することも必要。新たにアジアセンターの開設と「文化のWA(和・環・輪)プロジェクト」の実施予算が認められる見込みとなったことは喜ばしい。
- ・ 新しいアジアセンターの事業を企画実施する際には、かつてアセアン文化センターやアジアセンターが経験したことや実績を活用すべきである。これらのセンターが文化交流において果たした役割は大きく、基金は、その遺産・知的財産を十分に生かして、日本国内の対アジア、対アセアン認識を変えていく役割を担ってほしい。持続的なアジアとの交流には、国内に交流の担い手が育っていくことが必要になる。
- ・ 一方で、時代が変わり、交流の担い手も世代交代や多様化が進んでいることを認識しなければならない。日本の幅広く深い文化的蓄積から生まれている素晴らしい事業を把握すること、これらと連携し、民間の活力を取り込んでいくこと、民間の活力を高めることも重要である。

- ・ 海外に行くと、世界には日本人にない勢い(アグレッシブさ)があると感じる。また、東京オリンピック・パラリンピックの開催決定後、世の中の情勢が一気に動きだした。内外の情勢や相手の状況を把握した上で、「基金は何をするのか。何を特徴としていくのか」について考えていかねばならない。「選択と集中」を意識し、海外のニーズが高い、あるいは日本側の関心が高いテーマ(人権、福祉等)を毎年設定して事業を行うことも一案。機関支援等を行った場合には、日本で成果発表のシンポジウムを行う等、意識的に成果を示す取組みを行いアカウンタビリティを高める努力も重要。
- ・ 基金の現在の基幹事業と思われる日本語教育事業については、日本語を学習した先にどんなメリットを提示できるかを考えること、日本語学習者のその後をフォローしていくことも重要ではないか。
- ・ 国際共同制作は各国の文化芸術関係者が重視している取組みであるが、日本は資金的なものも含めて共同制作事業に必要な基盤が弱い。例えば海外のアーティストを受け入れるレジデンス等が不足している等の事情故に他国から共同制作の提案があっても対応が遅れ、日本は後ろ向きだと思われがちである。他国では大学の施設を活用している例を見かける。交流基盤が整うように基金が働きかけて、大学を含め外部の拠点や施設と協力して事業を行うことも重要である。

以上